
ラストプリキュア！

吹雪・レイスワード・ミッド・ティファエル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラストープリキユア！

【Nコード】

N5898X

【作者名】

吹雪・レイスワード・ミッド・ティファエル

【あらすじ】

少女は、自分を救った妖精達が危険に曝されていることを知る。妖精達を救いたい、その想いが少女をプリキユアとして覚醒させる！

はじまりの事故（前書き）

はじめまして！ 吹雪・レイスワード・ミッド・ティファエルです。
初投稿なので文章が汚いですが、最後まで読んで頂ければ光栄です！

はじまりの事故

いつもより、音が大きく聞こえる。

車のブレーキの音。

ざわめく人々の声。

救急車やパトカーのサイレン。

テレビ局のレポーターの声。

人の足音。

私の名を必死で呼び続ける母の声。

色んな音が、私の頭の中を巡る。

何度も、何度も。

繰り返し、聞こえてくる。

……… 苦しい………。

すごく、すごく。

すごく苦しくて、すごく眠い。

……… そうだ………。

眠ろう。

眠ってしまえばきつと………。

きつと……… この苦しさは……… 消えてくれる……… はず………。

そして少女は、そのまま意識を失った。

取り戻した意識（前書き）

遅くなってスイマセン！

誤字・脱字、表現や文章の下手さに問題があるので、ご指摘よろしくお願いします！

取り戻した意識

時空の狭間を進む、二匹の妖精がいた。

「もうスグッ……時空の扉に着くでスよッ！」

ウサギのような姿をした妖精は、焦った表情で走っていく。

その後ろを走っていたイヌのような姿をした妖精は、何かの気配を感じ取り、足を止めた。

「待つルム、ブラック！」

ブラックと名前を呼ばれ、ウサギのような姿をした妖精は犬のような姿をした妖精の元へ駆け寄った。

「どうしたでスカ、アルム？」

「何か気配を感じるルム……！」

アルムと呼ばれた犬のような姿をした妖精は周りを見渡し、あつと声を上げた。

「ブラック！ あれ！ あれから気配を感じるルム！」

アルムが指を差している方向を見て、ブラックの表情が固まった。

「意識の光でス……！」

「！！ 入り込んでくるなんて出来ないのに……！」

助けるでス、そう言ってブラックは高くジャンプをした。

それを4、5回繰り返して、漸く捕獲することが出来た。

「何か入れ物ないでスカ？」

「アルカナケースなら……あるルム」

アルムは背負ってきた袋から“アルカナケース”と呼んだ、コッブ型のケースを取り出した。

「それでいいでス！」

アルムからアルカナケースを受け取ると、ブラックは意識の光を丁寧にケースへと仕舞った。

「これでひとまず安心でスッ！」

「さ、早く人間の世界に行って探すルムー！」

二匹はそのまま、時空の扉へと向かっていった。

「海乃^{うみの}、まだ意識戻らないなあ……」

茶髪のショートボブの少女は、海乃と呼んだ、ベッドで呼吸器を付けて眠っている少女に目をやった。

「大丈夫だと思うよ、紅葉^{もみじ}。海乃はきっと目覚めてくれるよ」

椅子に座り本を読んでいた緑髪のポニーテールの少女は、本を閉じると海乃の枕元へ置いた。

紅葉と呼ばれた茶髪の少女は緑髪の少女の行動を見て、どうしてと呟いた。

「なんで碧^{みどり}はそこまで冷静なの？ 海乃の事、心配じゃないの？」

紅葉の直球な質問に、碧と呼ばれた緑髪の少女はため息を吐いた。そりゃ私だつて心配してる。でも、心配してるだけじゃ海乃は目覚めてくれない。私達は無力なのだ。

だが、碧はそれを口に出さず、無言で席を立った。

「……………ちよつと、私飲み物買ってくる」

そう言つて碧は病室から出て行った。

紅葉は再び海乃に目をやった。

他人^{ひと}には他人^{ひと}の考えがある。

ふと、そんな言葉を思い出した。

言い争いをしていると、いつも海乃がそう言つて仲裁していた。

「考えすぎたら空を見る、だっけ……………」

窓を開け、空を眺めてみる。青く、透き通っている。

ボーっと空を眺めていると、ほんの一瞬だけ空が光った。

何だろうと思い、光ったところを見続けていると、何かが猛スピードでこちらに飛んで来ることが分かった。

「な、ななな……………!？」

そして何かはそのまま、パニックになっていた紅葉の額にぶつか

った。

「いつ……！ いや、痛くない、痛くないぞ……」

紅葉は片手で額を押さえ、窓を閉めると、部屋を見回した。

「いたいでス??！」

「ここはどこルム……!？」

突然足元から声が聞こえ、紅葉はおそろおそろ下を見た。

そこには言葉を話す、イヌ(?)とウサギ(?)がいた。

「な、な、な……イ、イヌ(?)とウサギ(?)が……喋ったあああ
ああ!？」

「ボク、イヌじゃないルム！ ボクにはアルムって名前があるルム
……!」

「ブラックもちちゃんとブラックって名前があるでスー!」

「……私、夢見てるのね！ そうよ！ ただいまこの木衛^{このえ}紅葉、夢
を見てい「夢じゃないルムー!」

「そうでス！ あ、ちなみにブラック達はレディエンスから来た妖
精なのでス!」

ブラックはエツヘン、とお決まりの威張りポーズをとった。

「ね、ねえ……あんた達、何でここにぶっ飛んできたの?」

「あ、そうだったルム！ ボク達は意識の光に導かれてここに来た
んだルム！ あ、意識の光っていうのは生きてる人間が必ず持つて
いるものルム！ 人間はその他にもいろいろ「そんな話今いいでス!」

ムリヤリ話を終わらせると、ブラックはもつと重要なものがある、
と言ってアルカナケースを取り出した。

「この意識の光に導かれてきたのでス。だから、意識の光の持ち主
は今、このタテモノのどこかにいるでス!」

「え、それってどういう……」

「このタテモノに意識が無い人がいるということルム!」

もしかしたら海乃かも、そう言おうとしたとき、急に部屋の扉が
開き、碧が入ってきた。

「それって海乃の事じゃないか?」

「ウミノ？ その人は何処にいます？」

「ここだよ」

碧がそう言うと、プラックとアルムはきょとんとした顔で碧を見た。

「今ここで……このベッドで寝てる人が海乃よ」

「なら……手取り早いルム！！ プラック、アルカナケースを開けるルム！」

「はいはいです……。っと……あ！」

アルカナケースを開けた瞬間、意識の光は勢いよく飛び出し、海乃の中に入ってしまった。

「かかか勝手に入ったでスー！？」

「えっ……ちょっ、大丈夫なのこれ！？」

紅葉はアルムの頭を掴むと、ぶんぶんと振り回した。

「だ、大丈夫ルム、多分……」

「ホントにホントに大丈夫なの！？」

「絶対とは言い切れないル、ツム！？」

紅葉の手がすべり、アルムは海乃の呼吸器にぶつかった。

「……う……」

「あ！ う、海乃！ 海乃！ 海乃、起きて！」

「……っ……」

自分の名前を呼ぶ声が聞こえ、海乃はゆっくりと目を開いた。すぐに、自分の顔を覗き込む碧と紅葉の姿が目に入った。

「みど……り……。もみ……。じ……。ここ……は……。？」

「病院よ。貴方、事故に遭って此処に運ばれたの」

そう言って碧は海乃に優しく微笑みかけた。

「う、みつ、のおおお！」

紅葉は泣きじゃくりながら海乃に飛びついた。

「も……みじ……」

「ほ、ん……っ……とっ、にっ……！ しんっ……ぱ、いだ……っ
た、んだ、からっ……！」

海乃は呼吸器を外し、体を起こすと、紅葉の顔を見た。

「心配かけて……ごめん。でも、もう……大丈夫だからね」

紅葉はゆっくり頷くと、涙を拭き海乃に笑って見せた。

「……じゃあさ、退院したらお菓子パーティーしようね！」

「それってお前がお菓子食べたいだけだろ」

「でも、良いんじゃないの？」

「ボク達も！」

「……『ボク達も』……？」

三人で盛り上がっているところに知らない声が紛れ込んだ事を、海乃はすぐに気が付いた。

「ブラックも参加したいでスー！」

「ボクもルムー！」

海乃は聞こえた声の方に目をやった。そこには、床を飛び跳ねる動物——アルムとブラックの姿があった。

「あ！ お前ら！」

「え、ちょ、紅葉！ 碧！ コレは一体なんなの！？」

「え、あ、つと……えーつと……よ、妖精！」

何言ってるの、そんな返事が返ってくると思いながら紅葉はそう答えた。

「かわい——！ なにこのウサギ！」

海乃はそう言ってブラックを抱き上げた。

予想外の反応に、紅葉は啞然として海乃を見ていた。

「ウサギじゃないでスー！ ブラックでスー！」

「うわー！ 喋るんだー！ おもしろーっ！」

「やめるでスーっ！」

何とかしなくては、そう思った紅葉は先程の話を持ち出した。

「ところで！ パーティーは碧んちきまりね！ お菓子は持ち寄らせてことで！」

「ねえ、ブラックとイヌも参加させていい？」

「良いから、パーティーには必ず来てね！」

つつん、と後ろから肩をつつかれ、紅葉はすぐに後ろを向いた。

「紅葉、もう遅いから帰らないと……」

「あ……もうそんな時間？ 海乃、ソイツらよろしく！ それじゃ、またね！」

「うん、またね！」

二人は病室を出ていった。

「またね……か」

海乃は少し嬉しそうに、そう呟いた。

取り戻した意識（後書き）

なんかもう、めちやくちやです。
アドバイスお願いします!!!

妖精達の待ち人

黒髪のセミロングの少女は、長く、薄暗い廊下を歩いていた。

廊下の突き当たりの扉の前で立ち止まると、軽く3回、扉をノックした。

ブブツという電子音が聞こえ、扉が自動的に開くと、暗がりから小さなネコロイドが現れた。

ネコロイドは少女を見、ついてこい、というように暗がりへと戻っていった。

ついていった先に在ったのは、機械の山とコンピュータの光る画面を見ながらキーボードを打つ少年の姿だった。

少年は画面を見続けながら、少女に尋ねた。

「……ついにレイディエンスが動きだしたが……どうする、妹よ」

「どんな敵が来ようと私が倒して見せます」

少女がそう言うと、少年はキーボードを打つ手を止め、少女の方を向いた。

「“伝説の戦士”だったとしても、か？」

少年が呟くように尋ねた。

「心配は無用なのです。兄様の計画を邪魔する者は私が全て排除します」

少女のその言葉に、迷いは無かった。

少年はふっと笑い、その時はよろしく頼む、と言って、コンピュータの画面に向き直し、再びキーボードを打ち始めた。

少女は何も言わず、部屋を出ていった。

「海乃、退院おめでとー！」

そう言ってコップに入っているジュースを一気に飲み干すと、紅

葉はすぐにお菓子を食べ始めた。

「あ、ねえ紅葉、どれが新作なの？」

海乃が訊ねると、紅葉が鞆から次々とお菓子を出し始めた。無限に出てくるお菓子を、海乃は口を開けて見ていた。

「コレ全部っ！」

鞆から出したお菓子は山を作るほどの量だった。

「凄い……」

鞆に入る量とは思えないほどのお菓子をどうやって詰めるのだろうかと、海乃はお菓子の山を見て、そんなことを考えた。

「お前、いつも新作ばっか買うよな……」

呆れ顔で紅葉を見ながら、碧が言った。

「新作をいち早く買って味を伝えるのが私の指命なのだああ!!」

「伝わったことなんざ一度もないがな」

「ボキヤブラリー増やせでスー！」

「もつと勉強するルムー！」

「なん……だと!？」

次々と浴びせられる罵声から逃れようと、紅葉は海乃に目で助けを求めた。

「……否定できないねっ！」

親指を立てた右手を紅葉に突き出し、笑顔でそう言った。

「なん……だと……!？」

紅葉はすばやく窓を開け、外に向かって叫びだした。

「……この世の中、ひでえ奴しかいないのかああああ！　こんちくしょー!!」

「ちょ、おまつ！　何してんの!?　やめなさいっ！」

「あ、え、えーっと、叫びたかったから……。……すみません」

紅葉が窓を閉めようとしたとき、突然、何処から爆発するような音が聞こえた。

「!?!?　……ば、くはっ?　い、今の爆発音？」

「最近さあ、唐突に何か起こるね」

「あの方向って学校じゃね？ 変な部活が爆竹で遊んでるだけじゃねえの？」

紅葉は、ちがう、と呟いた。

「爆竹はあんな音じゃないよ。爆竹はもっところ……バババンって感じ！」

「あれは爆発ルム！」

「絶対に爆発です！」

ブラックとアルムが爆発音のした方向を指差して、大声で言った。

「……あそこから何か……強大な力を感じるです！」

「ウミノ！ あそこに連れて行つてルム！」

「な……何言ってるの？ 危ないでしょ！」

海乃の真剣な表情を見て、二匹は俯いた。

「……もしかしたら……あそこにいるかもしれないんです……」

「いるって……誰が？」

紅葉に尋ねられ、アルムは顔を上げ、言った。

「……プリキュア……プリキュアがいるかもしれないんだルム……」

「プリキュア……？」

三人は声をそろえた。

「……あんな爆発起こす奴が、おまえらの会いたい人なのか？」

碧はしかめっ面をして、二匹を見た。

「爆発を起こすのはプリキュアじゃないです！ 敵ですよ！ プリキュアは正義の味方なんです！」

「……じゃあ要するに、『プリキュアは爆発を起こした敵と戦う正義の味方』って事？」

二匹は頷いた。

海乃は少し考えて、軽い口調で言った。

「うん。じゃあ、行こっか」

「んな軽いもんか！？ ってか正気かよ?!」

海乃は笑いながら言った。

「助けられたんだから頼みごとの一つや二つ、聞くのが筋ってんじゃない？」

紅葉が口を開く前に、碧は言葉を継いだ。

「親友の恩人の頼みならば、行きましよう？ 紅葉」

「……わかった」

「きまりね！ 行くよ！」

ブラックとアルムを抱え、三人は家を飛び出していった。

妖精達の待ち人（後書き）

タイトルを決めるのに時間がかかる自分ってどうなんでしょうか
↑

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5898x/>

ラストプリキュア！

2011年11月26日15時48分発行